

<ジブチ事業> 「イエメン難民キャンプで「多目的センター」の建設が進行中です」



ICAN ホック事務所
Mouhyadin Said
Djama
～プロフィール～
土木技師（エンジニア）。大学で建築を学び、卒業後、企業で建築業に従事。2018年8月より現職。

ジブチ北部に位置するマルカジ難民キャンプには、紛争を逃れてきたイエメン難民が約 2,300 人生活しています。枯れた大地の真ん中に位置するこのキャンプには、これまで心に深い傷を負った難民の子どもたちを守るための十分な施設がありませんでした。そこで2018年3月から、アイキャンは子どものカウンセリングを行ったり、子どもの保護の情報を一括して管理する「子どもの保護センター」と、保護者たちが子どもの将来について話し合ったり、子どもたちが気温が高い砂漠のようなこの土地でも自由に体を動かすことができる「多目的センター」の建設を行ってきました。前者は2019年1月に完成し、すでに活用が始まっています。

多目的センターの建設は、5月までに壁と屋根付けまで進みました。この建設作業を進めるにあたり、私は毎日マルカジ難民キャンプ内の建設現場に足を運び、指定された資材で建設が滞りなく行われているか確認をしてきました。初めの段階でジブチの建設業者に対して、なるべく難民の方々を雇用してほしいと交渉した結果、この事業の大半は難民の方々によって進められています。そうした従業員たちと会話をしながら、必要に応じて技術的な監督・指導を行ったり、進捗を確認することも、私の仕事です。

建設の指揮監督をする上で難しいと感じるのは、工程の管理です。5月はほぼ1か月、皆が断食するラマダン期間と重なり、かつ、40度を超える猛暑の中、従業員の意欲を落とさずに事業を進めていくのは非常に大変でした。ジブチののんびりとした文化上、従業員を無理に急かすこともできません。普段のコミュニケーションの

おかげで、何とか彼らを鼓舞しながら、建設を進めてきました。また、建設に携わることで、難民の従業員たちの収入は増え、生活が改善しており、それも彼らのやる気につながっています。他にも、キャンプ内に住む人々から「アイキャンは子どもたちのためにいいことをたくさんしてくれる」という声をよく聞きますし、現地政府及び国連機関からも完成を待ち望む声があがっており、そのような期待も私のやる気にも繋がっています。また、困難に直面しても、建設業者が融通を利かせてサポートしてくれたり、必要に応じて提案をしてくれるので、信頼関係が築けていて仕事をしやすいと感じます。



多目的センターの完成は2019年7月を予定しており、建設自体は残り1か月で終了します。今後、難民及び地域の人々にとって重要な拠点として、何十年も使われていくことを願っています。

ある日のスケジュール

- 8:00 建設現場の監督
- 10:00 日報・週報作成
- 13:00 建設業者と打ち合わせ・進捗状況確認
- 15:00 打合せ内容のまとめ作成
- 16:00 建設進捗確認
- 16:30 進捗報告作成
- 17:00 帰宅

フィリピン事業（マニラ・路上） 5月8日／サンマテオ（フィリピン）
子どもの家で誕生日会を開催



5月8日、子どもの家に住むマーク君は16歳の誕生日を迎えました。共に生活をする他5人の子どもたち・寮母・ソーシャルワーカー・アイキャン職員がバースデーソングを歌っている間、マーク君は照れ臭そうでしたが、普段食べないケーキ

やみんなが作ったごちそうを前に、満面の笑みを浮かべていました。寮母は「子どもたちの幸せそうな様子が見られたので、誕生日会を実現できてよかった。」と話しました。

チャリティ語学教室 5月11日／愛知
世界課題を、英語で考える



チャリティ語学教室スマイルチケットでは、ウォームアップとして、毎週異なる「世界」に関するトピックを決め、世界の多様性について話し合っています。この日は、SDGsの達成率が最も高い国はどこか、というテーマで議論を行いました。

また、SDGsの目標を実現するための取組みについても意見交換を行いました。先生からは「質問形式で楽しみながら世界について学ぶ事もできる。」との声を頂きました。

フィリピン事業（マニラ・路上） 5月15・22・24日／ケソン（フィリピン）
カリエカフェの新商品開発会議



フィリピン大学キャンパス内のカリエカフェを運営する、元路上の子どもであるメンバーたちは、より一層の集客を図るため、新商品であるマンゴーシェイクの試作を行うとともに、費用計算をしたうえで新商品開発の会議を開きました。「学生が小腹を満たせるテイクアウトを出したい」という19歳のカリエカフェメンバーの提案から生まれたマンゴーシェイクは、6月からの販売に向けて最終調整中です。

また、困難に直面しても、建設業者が融通を利かせてサポートしてくれたり、必要に応じて提案をしてくれるので、信頼関係が築けていて仕事をしやすいと感じます。

街頭募金 5月25日／愛知
悔しさを感じながらも、発信することの重要性を再認識



学生・社会人計14名のボランティアの方々が街頭募金活動に参加し、フィリピン路上の子どもたちのための寄付を呼びかけました。30度を超える猛暑の中での活動となりましたが、参加者からは「街頭募金には初めて参加したが、今後も事務所でのボランティアに加えて募金活動も継続したい。」や「チラシを受け取ってもらえない時は悔しかったけど、呼びかけに耳を傾けて興味を持ってくれる人を大事にしていきたい。」などの声がありました。

また、SDGsの目標を実現するための取組みについても意見交換を行いました。先生からは「質問形式で楽しみながら世界について学ぶ事もできる。」との声を頂きました。